

# ARTA

AUTOBACS RACING TEAM AGURI

## Project



2017 ARTA DIGITAL Rd.3 AUTOPOLIS  
AFTER RAIN COMES FAIR WEATHER

# 「不運の先に道は開ける」

ARTA  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project

大分と熊本の県境近く、阿蘇の霊験あらたかなこの地にスーパーGTが2年ぶりに戻って来た。昨年は開催の直前に震災に見舞われ、オートポリスの第3戦は代替開催というかたちで最終ラウンドに組み込まれたからだ。サーキット施設や周辺道路にも震災の爪痕は及んでいたが、地元関係者の多大なる努力によって再びこの地にエキゾーストノートが蘇ることになったのだ。





GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT は、NSX 勢の中でもポテンシャルが高くポールポジションも争えるという自信を持って臨んでいたが、予選で前走車に引っかかったり黄旗に阻まれたりと満足なアタックができないまま 14 位に沈んでしまった。コースが曲がりくねり抜き所の少ないオートポリスの落とし穴にはまってしまったのだ。

しかしマシンの速さ自体が失われてしまったわけではない。決勝では追いつけて上位入賞も充分可能だと ARTA のメンバーたちは自信を持っていた。



そんな矢先、決勝直前のウォームアップ走行でコクピットの野尻智紀が無線を入れてきた。

野尻「アクセルが何も反応しない」

症状は開幕戦岡山でポールポジションをフィにした時と似ていた。

エンジニアの星学文がなんとかマシンを復帰させようと指示を伝える。

星「ピットに戻ってこられる？」

野尻「無理、無理。停めます」

星「カットオフを試してみてください」



野尻「オンオフしてもダメ。アクセルが反応しない」  
星「了解、何度か試してみて」  
野尻「ダメっぽいね……動かないね……。電源のオンオフ以外にやれることはないの？」  
星「ないな……今こっちでやれる対処は電源のオンオフしかない。間隔を開けたりして何度かやってみてもらえる？」

野尻「やってるけど、無理っばいね……。

これで引っ張られて帰って、直せるんだったら直してピットスタートしかないんじゃないかな」

星「そうだね。そうなると思う。戻って来たらデータを確認してから作業に入ります。」

総監督の鈴木亜久里も心配そうにモニターを見詰めている。

「これだとピットスタートになっちゃうか？」

星は「時間との闘いです。トラブルがセンサーとか簡単なところなら間に合うと思います」と答えたものの、作業には時間を要するもので、スターティンググリッドへと出て行く時間には間に合わず、ピットレーンからのスタートを強いられてしまった。



**AUTOBACS**

B.BAGUETTI KAMA

**AUTOBACS**  
COMTEC  
PITPRO  
Mobil 1  
ARTA  
AGURI

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project

新人ショーン・ウォーキンショーにとっては初のオートポリス走行で、予選前のフリー走行で20周ほどしか走ることができなかった。

確実に予選 Q1 突破を狙うならベテランの高木真一にステアリングを託すべきだが、ショーンの習熟度ではライバルたちがより限界ギリギリの攻撃をしてくる Q2 での上位獲得は難しいかもしれない。

しかしショーンが僅か 20 周程度のラップで高木に匹敵するタイムを叩き出してきたため、チームは Q1 のステアリングをショーンに託すことにした。ショーンもそれに応えて 14 位で Q1 を突破し、バトンを受け取った高木が Q2 で 4 番手タイムを記録したのだ。







EYGBL

Project

AFF  
BY MOTOGP

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**Project**

こうしていよいよ決勝を迎える。空は雲が多く、路面温度は前日の予選よりも 10 度ほど低い。各車がスターティンググリッドからフォーメーションラップへと出て行く中、小林崇志の乗り込んだ 8 号車はピットガレージにいた。

「さっきのトラブルの原因はもう対策済みなんでレースでは起こらないはず。この後の流れとしては、他のクルマがフォーメーションラップに入った段階でエンジンを掛けて、グリーンシグナルになった時点でピットレーンの出口まで出て待機します。この時点ではピットシグナルはまだ赤で、GT300 が全車通過してピット出口がグリーンになったらスタートです」



GT500 クラスの隊列に続き、GT300 クラスがメイン  
ストレートを通り過ぎてピット出口のシグナルがグ  
リーンに変わった。ここからが 8 号車のレースだ。

「落ち着いてね、落ち着いて行こうね」

亜久里総監督が小林にアドバイスを送る。

了解という意味で無線ボタンを押した小林からは  
エンジン音だけが聞こえてきた。

それだけもうドライビングに全神経を集中させてい  
るのだ。

小林は GT300 クラスのマシンを次々と料理して、  
遙か前の GT500 クラスの隊列を追う。

BRIDGESTONE

ARTA  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project



**super** **AUTOBACS**  
ニッポンを元気に!  
SINGHA

**AUTOBACS**  
2017 SUPER DRIFT CHAMPIONSHIP  
2017-18 2022  
H

**COMTEC**  
**PITPRO**

**COMTEC**  
**PITPRO**

**Mobil 1**

**Mobil 1**

BRIDGESTONE

BRIDGESTONE

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**Project**

しかし、わずか3周目、小林から力ない声で無線が入ってきた。

小林「ぶつかった……」

モニターには最終コーナーで大破している8号車と  
GT300クラスのマシンが映し出された。

星「動ける？」

小林「無理……」

星「怪我は大丈夫？」

小林「大丈夫」

星「押されたの？」

小林「LEONに接触した。

それでスピンしてそこにプリウス  
が突っ込んできた」

イン側にいたマシンがはらんできて8号車のリアに接触、たまたまスピンした8号車のフロントに、直後を走っていたもう1台が突っ込んできたのだ。誰を責めることもできないレーシングアクシデントだった。追い抜きの難しいサーキットで速度域の違う別クラスの20台以上の後方から追い上げを強いられれば、こういった事態も起こり得る。

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**Project**



**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**Project**

一方、55号車は事前の確認走行の感触からタイヤ無交換作戦を考えていた。JAF-GT 勢のコーナリングの速さは驚異的で、普通に戦っては勝つ見込みがないからだ。

8号車のクラッシュで路面に破片やラジエターからの水がまき散らされ、セーフティカーが導入された。55号車のエンジニア安藤博之がコクピットの高木に無線で伝える。

安藤「SC入ります、最終コーナー中央にクラッシュ車両あります」

高木「さすがにフロントスタビを柔らかくしたから支えがなくなってきたな。だから今無理してない、フロントをいたわりながら走ってるよ」





安藤「今路温が 39 度、気温 26 度」  
高木「これ、“プラン A” でいけるんじゃない？」  
安藤「はい、いけると思います」  
レース再開後、トップ 2 台の JAF-GT マシンたちはあっという間に 10 秒近く離れていってしまった。  
思わず高木が声を上げるが、エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市が勇気づける。  
高木「速え～な、マザーシャーシ！」  
土屋「真一も速いよ。トップ 3 台だけが 45 秒台、その後ろからは 46 秒台だから」





SUPER SINGOIA **Autobacs** ニッポンを元気に!

COMTEC  
Castrol  
CATTOLIERIA

**AUTOBACS**

COMTEC  
Castrol **EDGE**

**WORK**  
BRIDGESTONE

Ikebukuro BMW


COMTEC  
Castrol **EDGE**

**WORK**  
BRIDGESTONE

PITPRO

COMTEC  
PITPRO

Mobil 1

A close-up photograph of a person's hands cleaning a racing wheel. The person is using a spray can and a blue cloth. The wheel is highly reflective and has a complex, multi-spoke design. In the background, several other racing wheels are visible, arranged in a row, creating a sense of depth. The lighting is dramatic, with strong highlights and deep shadows.

ピットストップが近付いてくると、いよいよタイヤ交換戦略を決めなければならない。無交換でいくのか、2輪だけ換えるのか、4輪とも換えるのか。それによってピットストップの静止時間を稼いで前に出るか、コース上での速さを取るのか。55号車の面々は、ライバルの動向を見ながら作戦を練る。

高木「結構タイヤがキツくなってきたね。今何周？」

安藤「今26周です。左が厳しいですか？」

高木「そう、左が厳しい。あ、4号車が入った。4号車のタイヤを見てて」

安藤「4号車は2輪交換でした」

高木「じゃあ2輪交換でいくよ〜！左のみ交換。」

34 周目、高木はピットに飛び込んでショーンにステアリングを託す。  
タイヤは左側の 2 輪だけを交換し、クルーたちは素早いピットストップ  
でショーンを首位で送り出した。





安藤「P1だ、ポジションを譲るな。左側のタイヤは使っても良いけど、右側はマネージメントしてくれ」

土屋「セクター3だけ抑えれば絶対抜かれないよ！」

シヨーンは懸命のドライブでライバルたちと渡り合う。しかしレース序盤に見たようにJAF-GT勢2台の速さは別格で、タイヤを劣ることを考えれば彼らを無理に抑え続けるのは現実的ではなかった。45周目には2台に抜かれ3位へ。


安藤「P3、後ろは7秒後方」

安藤「残り10周、後ろとのギャップは7秒だ」

安藤「残り5周、ギャップは5秒」

そしてシヨーンは3番手を守ったままチェッカードフラッグを受けた。





安藤「ポジション3、よくやった、表彰台だぞ！」  
シヨーン「素晴らしいね、みんなありがとう！」  
土屋「みんなお疲れさん、良い仕事したよ」  
8号車を襲った不運の連続に沈みがちだったARTAの  
メンバーも、この結果に明るさを取り戻した。



DA NIS AN

EBBRO  
MINIATURE MODEL by M

MO®  
SIMULATOR

BARU

SPORTS

ING

VISUAL

Carbon

AUTOBACS

Hollis

PITPRO

Castrol  
EDGE

Coca-Cola

PROSTAFF

COMTEC

AUTOBACS

PITPRO

Coca-Cola

COMTEC

S. WALKINSHAW RH+A

NGK  
SPARK PLUG

ARTA  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project



**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project

22

21





**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
Project



55号車は他車に追突されて上位争いの権利を奪われた前戦の雪辱をしっかりと果たした。どれだけ努力してもがこうとも、襲いかかる不運はどうすることもできない。できるのは、それでも諦めず戦い続けることだけだ。そうすることで、こうして道が開ける。

8号車も55号車も、マシンのポテンシャルは決して悪くない。3戦を終えてそれが見えてきた。

あとは結果を掴み取るだけ。その時まで諦めることなく前に進み続けるしかないのだ。





株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL  
You tube チャンネル

To Be continued next race...

**ZERO**  
BORDER  
Team ZEROBORDER

©2017 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD